

特別講演 沖縄で切り拓くITビジネスの可能性と未来人材の育成について (後編)

比屋根 隆 (ひやね たかし)
株式会社レキサス代表取締役

株式会社レキサス代表取締役の比屋根 隆氏の特別講演の後編です。前編(1~6章)では、レキサス創業から現在、将来展望について紹介しました。後編(7~13章)では、比屋根氏が取り組む次世代リーダー育成への想い、育成プログラムの詳細や今後について語っていただいた内容と、質疑応答をまとめました。



7. 2000億の理由

レキサスの目標が、なぜ2000億の外貨を稼げる企業かについてお話ししましょう。学生起業家としてのスタートは、東京の人の「沖縄は安い」という言葉に憤慨し「違うことをやりたい」と思った気持ちからでした。会社を運営しさまざまな人々と交流するなかで、人としても経営者としても視野が広がりました。沖縄の現状、レキサスが沖縄に生まれた理由、皆さんとの繋がりを考えるなかで、何か経営者としてやれることがあるのではないかなと思うようになりました。

沖縄では「自立」という言葉を毎日耳にします。メディアはもちろん、家庭でも親に聞かされ、小学生の子ども同士の会話でも出てくるくらいポピュラーな表現です。ただ、振り返ると、どこまでやれば自立したと言えるかの定義が私の中になくことに

気づき、まずはレキサスで何をしたら自立といえるのかの定義をしようと考えました。現在、沖縄の観光産業は約5500億円ですが、こう考えた平成17年当時は4000億円。公共関連事業3000億、基地関連2000億で、沖縄のベスト3は、金額は変わっても順位は変わりません。そこで我々は、基地関連収入の2000億を1つのターゲットにしようと思いました。

なぜか、政治的な話は置いておいて、例えば、学費、生活費を仕送りしてもらっていた大学生が卒業し、自分で稼ぐようになり、親に仕送りはもういいです、ありがとうございましたと言えば、自立といえます。沖縄は国の税金を何十年も貰っています。沖縄の人達が「自分達でビジネスを通して稼いでいるので2000億は必要ない、困っている国や地域、アジアをより良くするプロジェクトに使いましょう」と言えた時にこそ精神的な自立があるのではないかと定義しました。

8. 2000億は無謀?

沖縄では1位の石油産業を除くと、電力や小売が大体毎年1位、2位で1500から1600億位です。だから、沖縄にはまだ2000億企業はありません。また、ランキングに入る企業は基本的には内需企業です。一方、補助金は外から来ますから、我々レキサスとしては外貨を稼ぎたい。沖縄は外貨を稼ぐ産業をこれからどんどん創らなければいけません。観光産業をもっと伸ばし、IT産業も農業も育てなければいけません。今まで沖縄を支えてきた企業はもちろんこれからもあると思いますが、全く新しい発想を持った企業が沖縄で発展していかなければならない、という問題意識があります。

2000億が難しいのかということと全くそうではありません。インターネットの世界では、ヤフーや楽

天が創業10年、11年で2000億企業になりました。これは時代の流れやM&Aもあったと思いますが、今の時代はさらに地球が狭くなっています。インターネットサービスが場所を超えという意味では、いいものさえあれば、沖縄はグローバルに見てもアジアの中でポテンシャルがあります。観光産業も何もかもひっくるめて事業構想できれば、2000億が達成できないなんていうことは嘘だと思いますし、むしろ5000億にも1兆にもできるポテンシャルがレキサスにはあります。ですから、2000億は絶対に達成できると考えています。

9. 次世代リーダーを

ただ、課題があります。レキサスだけではなく、人材が不足しています。人はすぐには育たないので、短期的に沖縄が取るべき策は、県外や海外から優秀な人材をいかに引き付けるかの取り組みをするべきです。実際レキサスも51%の人材はUターン、Iターンで採用しています。ただ、本質的、長期的には、沖縄の子供達をどれだけ今と異なる状況で育てられるかが課題です。レキサスも割と早くから、ハッカソンという言葉がない頃から、エンジニア向けの勉強会やコミュニティ形成を沖縄で積極的に行ってきました。

今日ご紹介するのは、その中でも2007年から継続し、現在第7期となったRyukyufrogs(リュウキュウフロッグス)という次世代リーダーを発掘、育成するプログラムです。「井の中の蛙、大海を知らず」という言葉の中の蛙をもじって、小さな沖縄から早く飛び出し、我々はこんなに広い世界にいるのだ、自分達にはもっとできることがあるということを感じてもらいたいと願って、Ryukyufrogsと名づけました。プログラムは毎年6月から12月の6カ月、実質プログラムは5カ月間で色々な体験してもらいます。夏休みを使って子供達をシリコンバレーに送り、世界一流の起業家、サービス、投資環境を見てもらうことが目玉になっています。

1つの特徴は、民間で運営している点です。公的資金はいらぬのではなく、自立するための人材育成モデルなので、公的資金がなくても持続できるモデルを作るべきだと。当初の3~5年は公的資金を使うにしても、使うための制約もありますし、人の

育成は細々とでも継続することが価値を上げていくので、まずは民間でやるのが重要であると思っています。そこで、このプロジェクトでは基本的に県内企業をメインに、県外企業からもご支援いただいで運用しています。キーワードは起業家、アントレプレナー、イノベーションです。そして、グローバルを志向するグローバル視点の人材を、沖縄からどんどん輩出するきっかけとなるプログラムにしたいと思っています。

10. 起業家育成プログラム

どのような内容かは映像で見てくださいよう(講演時は映像紹介、参考URL:<https://www.youtube.com/watch?v=sO4XqFVd6Ug>)。プログラムはかなりガチンコなもので、6カ月の間に子供達は泣きますし、チーム内で分裂もします。でも本気で育てたい思いでやっています。

プログラムを通じて、伸ばしたい特徴的なスキルがいくつかあります。まずは、発展的で協調的な自己主張です。色々が発散しても最後は調和で1つのことを導き出すスキルです。ピッチやプレゼンテーションスキルも身につきます。チームワークとリーダーシップ、コミュニケーションスキルも然りで、英語で話すことへの抵抗がなくなります。最後が最も重要ですが、高い国際感覚や地域貢献への思いです。沖縄ならではの起業家、リーダー、イノベティブな人はどうあるべきかを私なりに考えると、世の中をよくしたい想いと、もう1つはこの沖縄を変えるという想いです。沖縄が変わることでアジアや地球全体にいい影響を与える志を持った起業家を輩出していきたいと思っています。

このプログラムでは、参加した子供達と継続的に密に接しようとしており、子供達が沖縄に戻るタイミングで、かつ県外、海外の方が来る夏休みと年末の年2回連絡を取ります。今年も12月に忘年会をやります。5,60人の学生が集まるので、今何をしているか、3年後に沖縄に帰りこんなことをしたい、という志で繋がるコミュニティ作りになります。そこにスポンサーの起業家の方々にも来ていただき、どんどん人のプラットフォームを作っていく、そういうことに重きを置いています。そういう子供達が続々と生まれると、沖縄の次のリーダー、何かを実

現できるリーダーが生まれてくるだろうと期待しています。

年間スケジュールでは説明会の後に選考会、最後に合宿選考をやります。キックオフ研修、スタートアップ基礎研修などがあります。ピッチサービス構築研修は1分で自分を伝える、サービスを伝える練習です。英語研修は、基地に出入りし、同世代の子どもたちとシリコンバレーに行く前に英語に慣れる趣旨です。夏休みにはシリコンバレーに行き、戻ってから自分でプロダクトサービスを構想、提案します。シリコンバレーのスケジュールは全く遊ぶ時間がないほどで、色々な人に会い、企業訪問をし、夜は朝方までワークをします。最後はプレゼンテーション研修で、英語のプレゼンテーション研修を受け、最終成果報告会となる Leap Day で、今年は12月13日ですが、英語でプレゼンテーションをします。そこには、県外、海外からのゲスト、Ryukyufrogs のサポーターである起業家や投資家を呼び、本気のフィードバックをしていただくプログラムになっています。

11. 小学生を、OBOG を

6期は、大学生1人、高専の4年生が1人、高校生と中学生が併せて7名、合計9名でした。設立当初の2007年は大学生中心だったのですが変化率が期待したものではありませんでした。高校生まで対象を下げたらダイヤの原石で、言葉やマナーが未熟でガラガラしていますが、ものすごく熱く、ピフォーアフターでがらっと変わりました。大学生の場合、せっかく変わろうと思って就職、仕事となると中々時間がありません。高校生、大学生という学生としての時間を活用できるということで、結果として高校生や高専生中心になりました。去年オファーがあった中学生は、今年高校1年生で6月に初めて起業しました。ほかに高校3年生と1年生が起業しています。

今年の新たな展開は、Ryukyufrogs に上がってくる子供達の質を上げよう、小学生からやろうという話になり、東京のCA Tech Kids さん、沖縄のシアードバンスとレキサスでお金を出し合って、実験的に「CA-Frog キッズプログラマー特待生」を始めました。CA Tech Kids さんの小学生向けプログラム

を6カ月間受けたら小学生がどれくらい変わるかをみたくて、今年は2人が選抜され、研修を受けています。この小学生2人も Leap Day でプレゼンテーションをします。

ほかにも次のプログラムの1つで、「Frogs-NexSeed エンジニア留学制度」を始めました (<http://ryukyu-frogs.com/info/829>)。Ryukyufrogs に選抜された文系学生達は、シリコンバレーでイノベーションの可能性やモノ作りの楽しさを経験しても、沖縄に戻ると自分だけではどうにもならない…、アイデアを形にするスキルが欲しい！と悶々としています。子供達にも変わりたいという思いがあるんですね。そこで、セブ島で3カ月、6カ月コースのプログラミングと英語の学校をやっている NexSeed さんと提携し、OBOG を毎年2人選抜し6カ月間セブ島に送り込んでいます。今年は6期生で、もう少し男性にも頑張ってもらいたいです。大学1年生の元気な文系女性2人が手を挙げ、技術と英語を勉強しています。

沖縄は文系学生が多いのです。高専と琉球大学工学部があり、琉球大学工学部からは毎年60名程度卒業しますが、県内で就職する人は3分の1の20名。3分の1の20名が県外、3分の1が公務員志望で、なかなかプログラミングをする、テクノロジーを志向する人が少ないのです。そこで、私達の課題は文系の学生をどのようにエンジニア視点に育てるかで、今回の彼女達の育成がうまくいけば、これを県内の文系の大学に広げたい。情報学部を持っている大学と連携し、起業家マインドを持ち、プログラミングもでき、エンジニアリングと併せてビジネス企画ができる人材を創るモデルをスタートしたいと思っています。

12. 沖縄の未来

沖縄の未来を誰が創るのかといえば、長年の「自立」の流れで、結局、私達であり、これから未来を創る子供達です。子供達の6カ月の変化を見てみると、子供の可能性は無限大です。それに蓋をしてしまっているのは、きっと環境だったり、先生だったりするのかなと思うので、子供達が自分のリミッターを解除できる環境さえあれば、もちろん沖縄の子供だけではなく全国でもですが、ものすごいユ

ニークで優秀な人材が生まれる。その子供達が志を持ってこれからの地域社会を支えていくのです。

沖縄の自立では、沢山のハード投資がされていますが、これからは徐々に人への投資を行政も民間もしていけばいい。とくに民間部門が、補助金を貰うだけではなく、そこで稼いだのであればその一部をちゃんと人材に投資する基金を作り、継続できる人材育成の事業モデルを作っていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。



13. 質疑応答

ご講演の後、活発な質疑応答が行われたので、一部をご紹介します。

——口火を切った学会長の木嶋恭一氏からは「海外派遣生を募集しても学生が乗ってこない。モチベーションの高い人材を創るにはどうしたらいいのか」との質問がされました。

比屋根氏「環境ですね。今、大学生が集まらないとすれば、やはり高校、小学校を変えていかなければいけないと思います。Ryukyufrogsの1期、2期は、学生を集めることにものすごく苦労しましたが、今は志のある先生達とネットワークができ、ユニークな子をどんどん連れてきてくれます。一度入れば、Ryukyufrogsには中学生、高校生、大学生、今年は小学生も参加するコミュニティがあります。1つの方向に向かって、先輩、後輩の関係性がある環境で、学外のプロジェクトを経験することで、子供達がマインドを持つことが重要です。そこに学校の先生や、地域の起業家が積極的に関わり、その子供達を次のコミュニティに繋げていく。先程お話ししたセブ島に派遣した子供達には、帰国後もモチベ

ションを下げずにさらに成長してもらおう企画があります。恐らく沖縄県の万国津梁の海外事業がある組織で経験を積んでもらうことになるでしょう。誰かがそういう環境を作るべきで、周囲の大人のコミュニティの連携、連帯が重要です。そういう子供達が大学生になったら、どんどん自分達から海外に行きたいと言うようになるのではないのでしょうか。」

——続けての質問は「イノベーションや起業家育成の面で、Ryukyufrogsの貢献にどのような見通しをお持ちでしょうか。」でした。

比屋根氏「これは実績を積み重ねていくしかないと思っています。例えば、今年のLeap Dayで発表する7期チームが作った介護関係のビジネスモデルでは、当初は沖縄でフィードバックを貰おうとしましたが、県内企業から『新しくとてもじゃないがうちではやれない』と言われ、彼女達は、海外とのビジネスを日本で一番上手くやっている志のある人とコンタクトを取り、自費で訪問してきました。その病院の院長先生から「これ面白いからいい。絶対に必要だと思うのでLeap Dayは僕も行く」というフィードバックを貰ってきているんですね。こうしたいと思ってもうまくいかないことが多いのですが、少なくともこういった事例が増えてきている。今までにない介護業界のアイデアを実現した事例で、構想した子供達の、それを見ている子供達も含め、格好いいとか役立ったという成功事例を出すことが重要だと思います。その成功事例は間違いなく伝わっていると思います。」

——ほかに「プログラミングは嫌い、必要ないという学生に、プログラミングを教えなければいけないとき、どう教育をすればいいか」との質問に、

比屋根氏「Ryukyufrogsが構想しているモデルは、Jリーグのようなピラミッド構造です。J1、J2の基は、地域のボランティアが開くサッカースクールで、楽しんでやるところなのです。楽しんでいる人が本気でサッカーをやりたいと思ったとき、ちゃんとユースがある。沖縄で、IT業界で、CA Tech Kidsはまさにこのモデルで進めています。子供の頃に作るのが楽しい、プログラミングがというよりは、プログラミングで新しいモノを作った結果として、みんなにプレゼンすることが楽しいという環

境を沢山作る必要があると思います。それは現在の学校教育の中では難しいでしょう。1つのピラミッドの底辺は、最終的には地域のボランティア、つまりデザイナーやエンジニア、クリエイターで、彼等が未来の子供達に影響を与えられると思うので、コミュニティを作って、それを学校の外に置きます。学外に置けば、学内だけでなく、色々な子供達とのコミュニケーションを多く取ることができます。地域にクリエイティブセンターのような場を作り、現役のデザイナーやクリエイターが週末に有志で先生になって、子供達にプログラムを教えるのではなく、モノを作って発表する楽しさを教えることが重要だと思います。モノ作りが楽しい、何かを主張することがいい、そういう経験を持ってもらうのです。コミュニティリーダー同士が連携すれば、ここにこういう子がいるから次のプログラムはこれ、この子には1つ上のレイヤーのプログラムを、と紹介できます。そこに、例えば行政の支援など、縦横のコミュニティをしっかりと作る。底辺では、その業界で頑張っている先輩方が、ビジネスではなく、地元でボランティアをする、そういう流れが重要だと思います。」

略歴

比屋根 隆 (ひやね たかし)

学生時代のIT企業立ち上げを経て1998年にレキサスを設立。沖縄でのオリジナルITサービスづくりにこだわりながら、企画、開発からインフラ、デザイン、ハードウェアまでフルスケールで事業を展開中。沖縄での人材育成にも積極的に取り組んでおり、「Ryukyufrogs」では発起人として2008年以降約60人の県内学生をシリコンバレーに派遣。